

國學院大學學術情報リポジトリ

談話室 ブラジル日系人研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 欣雄, Watanabe, Yoshio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000191

ブラジル日系人研究

渡邊欣雄

本エッセイは「在華日本人研究」に続く、わたしの二作目の「日本研究」である。わたしがなぜこのように海外の日本移民や外国出自の日本人について研究しているかといえば、「日本とは何か」という問いと答えとが、相対として他の表象として明示できるからである。海外の「日本」や外国由来の「日本」が、日本在住の日本人や本国日本と対比されるとき、初めはオーセンシティブな問題として、そして議論が進むにつれて「日本」の多様性として理解されるはずである。とくにこの種の研究を通じて、わたしはネイティブや日本本国の日本人が知らない「日本」を知りたいのである。

ここに取り上げたいのは「日系ブラジル人」だが、これまでの題材とは異なり、日本の移民研究のなかで、かなり日本国内の研究が進んだ領域に属している。言い換えると「日系ブラジル人」研究については、とうていわたしの独自性を出せないのので、先行研究の成果を踏まえながら「高橋幸 一九九三 『日系ブラジル移民史』、三二書房ほか」、わたしの現地経験による認識と若干の展望を記すことにした。

よく知られているように、ブラジルへの日系移民の始まりは一九〇八年、笠戸丸による七八一人の移住による。この移民の時期は、日本の海外移民史から見ても、ブラジルに対する各国の移民史と比較しても遅かった。しかし日本にとってもブラジルにとっても幸いだったのは、その後の移民本国のブラジルへの移民制限と、他の移民受入れ国の日本移民忌避があり、一九二〇年代にはブラジルが世界最大の日本移民受け入れ国になっていったことである。

日本からの移民は早くからブラジルの農業振興に貢献しており、意外なことに今日のブラジル農業の基礎は日本移民

が築いたものである。栽培植物が日本の伝統野菜だったらよくわかるが、綿、胡椒、茶、じゃがいも、レタス、トマト、にんにく、キウイなどの栽培だというから、その農業史に驚くばかりである。だから都市近郊の大規模農場は、日系農場が少なくないように思われる。それから驚くのは一九三〇年代には、日系人による日本語学校が二〇〇校も出来ていたことである。世界の日系移民史や現在の他国への日本の無償援助で特徴的なのは、この学校建設だ。

海外で日系コミュニティはまず農業組合を組織し、学校建設を早期に行ってきたこと、これらの特徴はブラジルだけの特徴ではないと思われる。そして現在もなお、政府・民間を問わず、世界各地に日本人は他国のため学校建設に貢献している。

日系人は戦前には、すでに農業に限らず鉱山開発、産業開発、金融開発などを実施してきたようだが、戦後一九五〇年代に再開された日本移民は、日本の持つ技術援助を目的としたもので、同時に多くの日本企業がブラジルに進出し駐在員が増加したという。日系社会も二世三世の時代になり、さらに七〇年代に至るまでに連邦議員や大臣に就任する日系人が出るようになって、「日系人の国家的貢献とブラジルへの同化」が顕著になり、ついに一九七三年、移民船による日本人移民は廃止された。いまや四世の結婚相手は過半が非日系人であり、子供間の会話はほとんどが日本語とポルトガル語のバイリンガルか、ポルトガル語である。さらに五世六世と誕生しているいま、もはや出自としての日本人・日系人と日本語を母語とする者、そして日本由来の文化の担い手はイコールで結ばなくなっている。それだけでなく逆に、出自が非日系人だが、ブラジルにおける高い「日本」の評価・評判により、日本語・日本文化を学ぶ者が増加している。ブラジルの国家統合政策と多文化共生政策により、もはや「日本」はブラジルで安定した地位を得るまでになつたように思われる。

その結果としてのブラジルからの日本留学や日本への移民の増加。日本への日系ブラジル人の移民は、一九八九年の日本政府による出入国管理法の改正により増加することになり、日本の移民人口で第三位を占めるまでになった。しかし日本は、なおまだブラジルほどの多文化共生意識や政策が進んでいない。日本におけるなお根強い「単民族主義」（日本民族中心主義）。日本にこんなエスノセントリズムがある限り、わたしの「日本研究」は当分終えられそうもない。

（文化人類学・日本民俗学）